

カール・インマーマン 『ロンスヴォーの谷』 について

| | |
|----------|---|
| その他のタイトル | Über Karl Immermann : Das Thal von Ronceval |
| 著者 | 宇佐美 幸彦 |
| 雑誌名 | 独逸文學 |
| 巻 | 65 |
| ページ | 35-75 |
| 発行年 | 2021-03-20 |
| URL | http://doi.org/10.32286/00023414 |

カール・インマーマン 『ロンスヴォーの谷』について

宇佐美 幸彦

はじめに

『ロンスヴォーの谷』(*Das Thal von Ronceval*)¹はインマーマンの初期作品集『悲劇』²に収録された3つの劇作品のうちの一つである。これは中世の武勲詩『ロランの歌』を若いインマーマンがロマン主義風に変えたものである。『ロランの歌』はフランク国のカール大帝(シャルルマーニュ)(742-814)がスペイン遠征を行ったときに、ピレネー山脈のロンスヴォーの戦場で敗北し、大帝の甥ロラン(ローラント)が戦死した事件(778年)を扱ったものである。この事件を扱った武勲詩がまとまったのは11世紀後半とされ、現存しているもっとも古い資料は古いフランス語の武勲詩で1170年頃に書かれたとされる(オクスフォード写本)。ドイツ語でも12世紀にレーゲンスブルクの司教コンラートが記述した『ローラントの歌』がある(コンラート稿)。また19世紀の初頭にドイツではナショナリズムの傾向が強まったようで、過去の英雄としてのカール大帝やローラントを題材とする文学作品も書かれている。ここではその例としてフケーの『譚詩、ロンスヴォーの谷』とフリードリヒ・シュレーゲルの『ローラント』に注目したい。フケーとシュレーゲルの作品はインマーマンの劇作とは内容的に大きな違いがあるが、イ

1 ロンスヴォーはスペインとフランスの国境にあるピレネー山脈の谷の地名である。インマーマンはドイツ語で *Ronceval* (ロンセヴァル) と書き、スペイン語では *Roncesvalles* (ロンセスヴァリエス) であるが、ここではフランス語の *Roncevaux* (ロンスヴォー) という記述を用いることにする。この土地がドイツにないことと、フランス語の『ロランの歌』が普及しているためである。

2 Immermann, Karl: *Trauerspiele*, Hamm und Münster (Schulz und Wundermann), 1822. (以下 *Trauerspiele*)

ンマーマンはこれらの作品を読んでいた³ようなので、ここではコンラート稿の『ローラントの歌』とフケーとシュレーゲルの作品を比較しながら、インマーマンの作品の特徴を探ってみたい。

1. コンラート稿『ローラントの歌』

1-1. コンラート稿の概略

カール大帝のフランク王国は、現在のドイツ、フランス、イタリアなどにまたがるヨーロッパ中部の大国であった。当時の記録はほとんど残されていないので、ロンスヴォーの戦を扱った上記の作品における登場人物や地名の本来の名称をはじめ、この戦闘が実際の歴史としてどのような経過をたどったのか不明な点が多い。文書として最も古い記述が残るオクスフォード写本にしても、実際の歴史上の事件から約400年後に記述されたものであり、登場人物や地名などは多くの場合、粉飾されている。しかもカール大帝のフランク王国は多民族からなる統一国家であったが、843年のヴェルダン条約により、帝国は三分割され、そのうち西フランクは現在のフランスへ、東フランクは現在のドイツへ発展する基礎となった。オクスフォード稿は西フランクの流れをくむフランク王国カペー朝時代、コンラート稿は東フランクのホーエンシュタウフェン王朝時代に成立したものであり、それぞれ古いフランス語と中世ドイツ語で書かれている。ここではドイツ語で書かれたコンラート稿の『ローラントの歌』を取り上げたい。

コンラート稿はオクスフォード稿のドイツ語翻訳である。基本的な筋の展開は同じではあるが、いくらか異なる点もある。まず分量はオクスフォード稿が4002行なのに対し、コンラート稿は9094行と倍以上に増えている。この要因はいろいろあるが、主なものは、(1) 戦闘場面の詳しい描写、(2) 宗教的な色彩の強化、(3) 中世宮廷的生活の反映、などであろう。(1)については、合戦に参加する武将を詳しく紹介し、戦闘においては、武器の紹介や、相手をいかに殺戮したかという残忍な描写

3 Deetjen, Werner: *Immermanns Jugenddramen*, Leipzig, 1904, S.24f.

が長々と続く。槍が相手の体の裏まで突き抜けたとか、相手の体を兜の上から真つ二つに切り裂き、馬まで切り落としたとか、耳の穴から血が吹き出したなど、人殺しの凄惨な場面がこれでもかというほど次々に描かれ、この殺戮場面を描くことがこの書の本来の目的かと思われるほどである。司教でありながら、コンラートはきわめて残虐趣味の人物であったように思われる。(2)については、聖職者としては当然のことながら、戦闘に臨むときのカール大帝の祈りや、キリスト教のために命まで捧げることを説教する大司教テュルパン (Turpîn)⁴のセリフなどが拡大されているものである。(3)については、ローラント (Ruolant)⁵にオリヴィエ (Olivier) が妹でローラントの婚約者であるアルデ (Aldâ, Alde) の名前を挙げ、中世騎士の女性への愛 (ミンネ) を強調する点などである。ここではコンラート稿を掲載したレクラム文庫の作品⁶にしたがって主な内容を紹介しておく。

1-1-1. カール大帝のスペイン遠征とマルシル王による虚偽の和平提案 (第 1-890 行)

フランク国カール (Karl) 大帝のもとに天使が現れ、異教徒が支配するスペインへ出陣し、キリスト教の世界を広めよと、神の命令を伝える。フランク国の軍隊はスペインに出発し、トゥルトーザの町をはじめ各地を攻略し、スペインの異教徒マルシル王 (Küninc Marsilie) を高地のサラゴサの町に追い詰めた。異教徒側は虚偽の和平提案をする策略をたて、ブランカンドラン (Blanscandîz, Blancandrins) らの使節をカール

4 Turpîn はドイツ語では「トゥルピーン」と発音するようであるが、ランス (フランス) の大司教なので、本稿ではフランス語読みして「テュルパン」と記述する。

5 フランス語の『ロランの歌』(La Chanson de Roland) の主人公の名前 Roland はフランス語では「ロラン」と発音するが、ドイツ語では「ローラント」である。コンラート稿では Ruolant (ルオラント) と記載されているが、本稿では現代語に従い「ローラント」と記載する。

6 *Das Rolandslied des Pfaffen Konrad*, *Mittelhochdeutsch/ Neuhochdeutsch*, hrsg. von Dieter Kartschoke, Stuttgart (Reclam), Durchgesehene u. bibliographisch aktualisierte Ausgabe, 2011.(以下 *Konrad*)

大帝の陣営に派遣する。

1-1-2. ガヌロンの裏切り（第 891-3224 行）

ローラントはマルシル王を信用できないとして異教徒側の提案に反対する。オリヴィエやテュルパンらも反対するが、ガヌロン（Genelûn, Ganelon）はこの和平提案を受け入れるべきだと意見を述べる。ヨハネス司教が立ち上がり、マルシルの提案に偽りがどうか、こちら側からの使者をマルシルのもとに派遣し、内情を探ってはどうかという提案をし、異論はないので、それでは誰を派遣するかを決めることになった。ローラント、オリヴィエ、テュルパンが使者を買って出るが、カール大帝は賛成しない。武力は強くても熱血漢のローラントやオリヴィエには忍耐強く真相を探るという外交的手腕が十分ではないと大帝は判断したようである。この時、ローラントが発言し、ガヌロンは経験豊富で、弁舌もうまいので適任だと推薦する。フランク国の使者が以前に、マルシル王の所へ派遣されたとき、残忍なマルシル王によって処刑されたことがあるため、ガヌロンは命の危険を感じて青ざめる。この時にローラントによって危険な使者に指名されたことを根に持ち、ガヌロンはローラントへの復讐を心に誓い、フランク軍に対する裏切り者となるのである。しかし大帝はガヌロンの心の中を知らず、ガヌロンを適任として使者に決定し、マルシル王の城へ派遣する。

ガヌロンとブランカンドランはマルシル王の城へ向かう道中、懇意になり、ローラントが高慢で、血に飢えた殺人鬼であるという点で意見が一致し、協力してローラントとオリヴィエを殺害しようという密約が成立する。マルシル王は、虚偽の和平をカール大帝に提案する一方で、大帝が提案に乗ってフランク国へ帰国するのを見越し、異教徒の他の支配者たちにキリスト教徒に対する戦いを呼びかけ、軍の派遣を要請する。スペインの全異教徒（回教徒）勢力がマルシル王への支援軍を派遣することになり、その兵力は合計十数万となった。

ガヌロンはカール大帝の陣営へ戻り、マルシル王が当初の和平提案の通り、カール大帝の支配下にはいり、キリスト教の洗礼を受けると約束し、貢物や人質を差し出したことを報告する。カール大帝はスペインの

キリスト教化を成し遂げたので、フランク国へ帰国する決意をした。しかしスペインに残ってフランク軍の支配を保つ人物が必要だという議論が生まれた時、ガヌロンは狡猾にローラントが勇猛で、異教徒たちに恐れられているから最適任であると推薦する。武将たちの意見が一致してガヌロンに賛同するので、カール大帝はローラントに任せて、帰国の途につくことになった。

1-1-3. ロンスヴォーの戦い（第 3225-6949 行）

ローラントには精鋭の武将と 2 万の兵が残された。ローラントはヴェヌラン（Venerant）と名付けられた堅牢な兜をかぶり、デュランダル（Durendart）という名の名剣を持ち、ヴェヤンティフ（Velentich）という駿馬に跨っていた。ローラントが山に登って偵察すると、すでに敵の大軍は押し寄せていた。マルシル王は兵を 12 の軍団に振り分け戦闘の準備を整えた。この時、ローラントと親友オリヴィエの間で意見の違いが表面化する。オリヴィエは圧倒的な数の敵軍を見て、ローラントに角笛を吹き、カール大帝の軍を呼び戻すべきだと意見をする。自らの武力に自信を持ち、神の加護があると信じているローラントは、助けを求めるのは恥だと思い、親友の意見を拒否する。オリヴィエは自分の妹でローラントの婚約者であるアルデの名前を挙げ、愛する女性のためにも助けを呼ぶべきだと言うが、ローラントはそれでも角笛を吹くことを拒否する。

いよいよロンスヴォーの谷で決戦が始まる。異教徒側の先陣アーダルトがローラントに切りかかるが、ローラントは真つ二つに切り殺す。フランク軍は「モンジョア」の叫びをあげて、氣勢を上げる。オリヴィエも敵の武将ファルサロンを槍で突いて倒す。フランク軍のマルセル伯爵は異教徒軍の武将アグランタンに槍で突かれる。異教徒軍は「フォレ・ヴァルダント」と叫んで氣勢を上げる。個々の武将の戦いが次々に詳しく述べられているが、双方とも多くの犠牲者を出し、戦場は血にまみれる。

フランク軍に多くの犠牲者が出たことをローラントは悲しみ、ついにカール大帝の援助を求める角笛（オリファント）を吹く決断をする。し

かし今度はオリヴィエが角笛を吹くことに反対する。オリヴィエはもう角笛を吹く時期を逃してしまい、いまさら援軍を求めても遅すぎる、ここまでくればもはやここで討ち死にするまで戦うより仕方がない、と主張する。この親友二人の口論を聞いていたテュルパンは仲裁に入り、今からでも角笛を吹きたいのであれば、吹いてみればよいと語り、ローラントはそれを実行する。角笛の音は遠く山々を越え、カール大帝の所まで到達した。角笛を聞き、異教徒軍がローラント軍を攻撃していることを知ったカール大帝は、ガヌロンの裏切りを悟り、これを拘束した。そして大帝は軍を引き連れて急いでロンスヴォーへ向かった。

ロンスヴォーでは熾烈な戦いが続く。マルシル王はフランク軍の武将たちを次々に打ち取った。これに対してローラントはマルシルの息子ジュルファルーを倒した。ローラントとマルシルがそれぞれ怒りに燃え、直接対決することになった。ローラントはマルシルの右腕を切り落としたが、マルシルは逃亡した。しかし異教徒軍には新たにカルタゴとエチオピアから来た軍勢5万人が加わった。これに対してローラント軍で生き残っているのはわずかに62名であった。敵の武将アルガリクの一撃がオリヴィエの体に突き刺さった。オリヴィエも名剣アルトクレールで反撃し、相手を切り殺した。ローラントはオリヴィエを助けに入るが、意識も朦朧としたオリヴィエはローラントを敵と勘違いして、切りかかる。ローラントは声を出して諫め、オリヴィエはその声で相手が親友だということが分かり、謝罪する。オリヴィエはその後まもなく息を引き取る。テュルパンも相手の攻撃を受け、落馬する。しかし倒れながらもなお名剣アルマースを抜いて、敵の兵士を何人も倒した。ローラントとテュルパンには敵軍も恐れを抱き、逃げ出した。ローラントは味方の戦死した12親将の遺体を集めた。疲れて意識を失ったローラントに角笛で水を汲んで来ようと、瀕死のテュルパンはよろけながら歩いていくがその途中でとうとう転倒して死ぬ。ローラントは一人で木の下にいたが、一人の異教徒兵が名剣デュランダルを盗もうと近寄ってきた。ローラントはとっさにもう一つの手を持っていた角笛で相手を叩き殺した。ローラントは名剣に向かってこれから誰一人傷つけないようにと言い、剣を岩にたたきつけて折ろうとした。しかし10回試みても名剣は傷一つつかなかった。ローラントは祈りを捧げ、息を引き取る。

1-1-4. カール大帝の復讐、回教徒軍との決戦（第 6950-8673 行）

カール大帝はロンスヴォーに到着し、ローラント、オリヴィエ、テュルパンらの遺体を見て深く悲しむ。大帝の所へ天使が舞い降り、大帝を慰め、復讐せよと指示する。大帝軍は異教徒軍を追ってエプロ川まで進軍する。マルシルはサラゴサの居城に逃げ帰るが、そこへ回教諸国家の総督であるペルシア王のパリガンが応援に駆け付けた、と使者が伝える。カール大帝はいったんロンスヴォーに戻り、戦死した勇士たちのために大きな墓を作り、追悼した。

ついに世界的な規模の大激戦が始まる。ペルシアやアフリカから多くの武将と兵力を結集した回教徒軍の総大将パリガンは 10 の軍団にそれぞれ 3 万人の兵を与え、総攻撃を開始する。キリスト教軍は神に祈りを捧げ、ローラントの復讐を誓って出撃する。キリスト教軍は「モンジョア」、異教徒軍は「ブレシオサ」と合言葉を叫び、氣勢を上げる。それぞれの軍の武将たちが一騎打ちをし、殺戮が続く。最後にはパリガン総督とカール大帝の一騎打ちとなった。カールは頭をかすめる一撃を受けるが、天からの声に励まされ、気を取り直して反撃し、とうとうパリガンの頭蓋骨を砕いて勝利する。異教徒軍は逃亡した。マルシル王は異教徒軍の敗北を見て心痛のあまり絶命した。カールはサラゴサに入城し、マルシルの妃であるブレヒムンダ（Brechmundá）はカールに降伏した。王妃は大帝にキリスト教に改宗したいと申し出て、サラゴサの民もキリスト教に改宗した。

1-1-5. ガヌロンの裁判（第 8674-9094 行）

フランク国の首都アーヘンに戻ったカール大帝は諸侯会議を開催する。冒頭にローラントの婚約者アルデが現れ、大帝からローラントが戦死したことを告げられると悲嘆にくれる。大帝は息子のルートヴィヒをローラントに代わって結婚相手に提案するが、アルデは悲しみのあまり倒れ、そのまま絶命する。その後ガヌロンの裁判が始まる。ガヌロンはフランク王国と皇帝を裏切ったのではなく、ただローラントに対する私怨を果たしただけだと、国家への裏切りについては潔白を主張する。結

局、決闘裁判が行われることとなり、ガヌロン支持側からは、ガヌロンの甥ビナベルが代表となり、ガヌロン有罪の立場からはティアリヒが決闘を行うこととなった。それぞれ30名の連帯保証人が付き決闘が始まる。ビナベルは体格も大きく武力も強かったが、最後にはティアリヒが勝利した。ガヌロンは手足を馬に縛られ、四つ裂きにされて処刑された。ガヌロン側の親族からなる30名の連帯保証人もすべて死刑となった。

1-2. コンラート稿の特徴と問題点

1-2-1. キリスト教軍の「聖戦」思想に基づくローラントの美化＝歴史的・地理的事実からの逸脱

カール大帝のスペイン遠征の目的が異教徒を成敗し、キリスト教を拡大するものであることが最初に強調されている。カール大帝の時代（8世紀）にはスペインでは回教徒のコルドバ・ウマイヤ朝の時代で、ここで異教徒とされているのは回教徒（サラセン人）のことであろう。しかしこの物語が成立した時代（11—12世紀）は、オクスフォード稿にしてもコンラート稿にしても十字軍の時代であった。この作品には、キリスト教の拡大のためであれば武力の行使は当然で、異教徒の命や財産は破壊しても構わないという「聖戦」思想が根底にあると言えよう。この聖戦の強力な推進者としてカール大帝やローラントが美化され理想的な戦士として描かれているのがこの作品である。とくにローラントは戦死したことにより、「殉教者」としてキリスト教徒の中で高い評価を得られるように描かれている。ロンスヴォーの戦いについては詳しい歴史的な資料が残されていないので、不明な点も多いが、この作品には明らかに客観的な史実を離れて、12世紀ごろの十字軍時代の脚色と思われる描写が多くみられる。例えば大司教テュルバンは作品では聖戦者でありながら、ロンスヴォーの戦場で異教徒軍を大量に殺害する英雄的武将として描かれているが、歴史的な記録によれば、ランスの實在の大司教（748/751-794）で、教会の改革者としては有名であるが、作品のようにスペイン遠征に参加したという記録はなく、またローラントと共に戦死

をしたわけではない。この作品の重要な悪役で裏切りを働くガヌロンはまったく架空の人物のようである。作品ではガヌロンはマイッツ公で、カール大帝の妹と結婚しており、ローラントの義父ということになっているが、歴史的な記録にはそのような人物は見当たらない。サンスの大司教で **Wenilo** (ウエニロ) という人物がおり、858年にシャルル禿頭王に裏切りを働き、公会議で処分されたので、作品の作者がこの名前をもじって **Ganelon** (ガヌロン) という作中人物に作り上げたとされる⁷。歴史的な資料に基づいていないため、作品の中で戦闘に参加する武将たちの名もカール大帝とローラント以外は架空のものであり、また敵軍のマルシル王や武将たちもすべて実在した人物ではないようである。そもそも歴史的な記述によれば、ローラントたちの軍を全滅させたのは、回教徒の軍勢ではなく、ピレネー地方のバスク人の部族だとされている。

作者コンラート（そしてその原本・情報源であるオクスフォード稿）は8世紀ごろのスペインの歴史的・地理的状况についてはほとんど知識を持っていなかったようである。フランク軍がスペイン全土をすでに制圧して、今や異教徒側はサラゴサに立てこもったマルシル王の勢力のみであると作品では記述されているが、歴史的な事実としては780年頃にはコルドバを首都とした「後ウマイヤ王朝」が大きな勢力として支配しており、むしろスペインの東北の外れ（フランス国境に近い所）にあるサラゴサは、スペイン全土から見れば辺境の地で、フランク王国に対する前線基地の役割を果たしていた地域である。この作品で述べられているように「最後の砦」であるサラゴサを制圧すれば、スペイン全土をキリスト教国とすることができるとするのは大きな誤りであろう。作品では、マルシルの使者ブランカンドランらが向かう先はカール大帝が陣営を築いているコルデレス (**Corderes**) (第609行) である。これをレクラム本の編集者カルチョケはコルドヴァ (**Cordova**) と現代語に訳している⁸。コルデレスは架空の地名だという説もあるようだが、もしこれがスペインの南部にあるコルドバ (**Cordoba**) であればサラゴサからはほとんどスペインを縦断するほど何百km (直線距離で約530km) も離れたところにあり、使者たちがたどり着くだけでもかなりの日数がかかり、

7 『ロランの歌』、岩波文庫、1965年、有永弘人訳、255ページの注参照。

8 *Konrad*, S.49.

また、コルトバにキリスト教軍が滞在しているのであれば、遠く離れたサラゴサのマルシルは脅威を感じることはなく、偽の和平提案をする必要もないように思われる。それにしてもフランク軍が南部のコルドバを先に攻略し、フランスに近いサラゴサを最後に残して置くのはまったく不可解である。おそらく作者がスペインの地理を知らないため、適当な地名を挙げただけに過ぎないと思われる。作品では、カール大帝の陣営に着いた異教徒のブランカンドランらは、フランク軍の騎士たちが、退屈凌ぎに楽器を弾いて歌を歌い、フェンシングの練習やタカ狩りをし、高貴な淑女たちが金の装飾や絹の服で着飾り優美な生活をしている様子を見る⁹が、これらは自国から遠く離れた遠征軍の野営地の姿とは考えにくい。おそらく12世紀のヨーロッパにおける君主たちの中世的宮廷生活からの類推でこうした描写が後から付け加えられたのであろう。

1-2-2. ガヌロンの裏切り

ガヌロンは危険な使者に指名されたことを恨み、ローラントに対して仕返しをしようとする。そのためマルシル軍と組んで、ローラント軍を全滅させる。しかしこの展開は論理的にはあまり説得力がないのではないだろうか。重臣たちの会議で、誰かをマルシルの所へ使者として派遣することが決まった以上、カール大帝の臣下であれば、誰一人そうした危険な役割を逃れたいと言うことはできないであろう。しかもローラントは真っ先に自薦をして自分が行くと言っているのである。それを大帝から止められ、オリヴィエもテュルパンも進んで自ら使者になりたいと申し出たが、これも大帝は許可しなかったので、ローラントは使者にふさわしい人物としてガヌロンの名を挙げたのである。ローラントがガヌロンの財産を狙っているのであれば、危険な任務を自分が引き受けるとは最初に言いたさなかつたであろう。この協議の場で他の重臣たちはガヌロンを使者とすることに異論はなく、カール大帝がローラントを外し、ガヌロンを派遣すると最終決定したわけだから、ガヌロンはローラントではなく、むしろカール大帝に対して恨みを抱き、その抹殺を考え

9 Konrad, S.50 ff.

るべきだったのではなかろうか。

ガヌロンは異教徒側の城へ到着すると、マルシル王に助言する。その内容は、カール大帝は神に守られて、全能の人物なので、虚偽の和平提案で和解し、フランク国へ帰国させ、その後、ローラントがスペイン支配の責任者となるはずであるから、このローラントとオリヴィエなどの一味を攻撃し敗北させれば、マルシル王の支配は元通りになり安泰であるという、フランク軍に対する分断作戦である。そしてマルシルとガヌロンはローラント殺害を誓って、宗教的な儀式を行うのであるが、このときイスラム教徒のマルシル王がアポロの像を持ってこさせ、その前で誓いを行ったと書かれている¹⁰。まず、イスラム教とギリシアの神がなぜ結合するのか不明であるし、またイスラム教が一神教で偶像崇拜は厳しく禁止されていることも作者は知らないようである。サラセンと呼ばれた異教徒の間では、モハメッドとアポロが神とされ、偶像を拜んで儀式を行ったと、中世のキリスト教会の内部では信じられていたようであるが、それはキリスト教内部の人々の偏見に満ちた固定観念に過ぎない。少しでもイスラム教に関する基礎的な知識があれば、このような間違った記述は容易に防ぐことができたはずであろう。それにしてもここで重要な点は、ガヌロンがローラントに対して殺意をあからさまに示し、フランク軍に対する裏切りを表明しているだけでなく、異教徒の偶像の前で誓いをたてることによって、キリスト教まで裏切っていることであろう。

1-2-3. 救助の角笛をめぐるオリヴィエとローラントの意見対立

ロンスヴォーの戦いが始まる時、10万を超える敵の大軍を前に、オリヴィエは冷静な客観的判断をして、ローラントに救助を求める角笛を吹くように要請する。これに対して総司令官のローラントは純真な心の持ち主で、敬虔であり、武人としての技量は優れているが、熱血漢タイプの若者で、冷静な判断ができないようである。軍隊の総司令官としては、戦力の分析や状況判断ができないことは致命的な欠陥である。相

10 Konrad, S.170.

手が大軍であるにもかかわらず、ローラントの軍は大奮闘をするのではあるが、最終的には2万人の兵を全滅させるという結果に終わる。その責任は総司令官にあるのではないだろうか。相手の大軍を見て、ひるんで後退することを、恥ずべき行動であり、武将としての名誉を汚すものだと考え、ローラントは角笛を吹くことを拒否するのであるが、勝利への展望もなしに単純に相手に突進して多くの犠牲者を出すことの方が司令官としては恥ずべき行動であろう。

激戦が続き、ローラント軍の将兵にも大きな犠牲が出た。かなり劣勢の状況になってから、ローラントはついに援軍を呼ぶために角笛を吹こうとする。戦闘が始まる前から、このような事態になることはほぼ確実に予想できたのに、なぜローラントは最初から角笛を吹こうとしなかったのか。総司令官ローラントの過信と甘い判断がその原因であったことは明白である。オリヴィエが怒って、いまさら遅すぎると非難するのも当然であろう。テュルパンの助言でローラントは角笛を大きな音で鳴らす。

人力で鳴らす笛の音が実際にピレネーの山地の中でどれくらい遠くまで届くのか分からないが、ここでは文学作品なので、どんなに離れていてもカール大帝の所まで到達することが可能なのであろう。ガヌロンはローラントが草の上でアブに刺されて驚いたか、ウサギ狩りをしていて、笛を吹いたのだらう¹¹と、マルシル軍の襲撃ではないとごまかそうとするが、カール大帝は遠くから聞こえる角笛のわずかな音をローラントの助けを呼ぶ合図であると聞き分け、ローラントが苦境に立っていると確信して、ガヌロンを逮捕する。カール大帝は全軍を引き連れて、ロンスヴォーに引き返すが、その到着前にローラント軍は全滅するのである。

1-2-4. ローラントの致命傷の原因

オリヴィエは敵将アルガリクに体を突き刺され、テュルパンも敵（敵将の名は挙げられていない）の刀によって、馬から落とされ、落馬した

11 Konrad, S.416.

ところを敵兵によって槍で突かれた、というように致命傷を受けた場面が描かれるが、ローラントの場合は相手の攻撃によって痛手を受けたという記述はない。作者がローラントを武力ではだれにも負けない英雄として扱っているからであろう。そのためどうしてローラントが死ぬのかが読者にはよく理解できない。ローラントは多くの敵の将兵を切りまくったので、大きな疲労の蓄積があったのに加えて、角笛を力いっぱい吹いた時、ほとんど頭の骨が壊れるほどで、血の気が失せたという描写¹²があるので、この時の出血が死を招いたとしか考えることはできない。

1-2-5. キリスト教軍と回教徒軍の世界大戦という虚構

コンラート稿では、回教徒国の総督であるパリガンが乗り出し、ペルシアやアフリカなど総勢 30 万を超える兵力が異教徒軍に集まる。こうなると全回教徒軍とキリスト教軍代表の世界的な規模の全面戦争ということになる。作品ではキリスト教軍が勝利し、スペインがキリスト教国になったかのように描かれているが、歴史的事実としては、回教徒の「後ウマイヤ朝」は 1031 年まで続き、その後スペインをキリスト教化しようとするレコンキスタの活動が盛んになって、ようやく 1492 年にグラナダを陥落させ、イスパニア王国が確立されてスペインのキリスト教化が成し遂げられるのである。カール大帝の時代の 8 世紀には、そしてこの作品が書かれた 12 世紀の十字軍の時代にも、スペインの異教徒を征服するということはキリスト教側の単なる願望でしかなかったと言えよう。歴史的な事実としては、そもそもロンスヴォーの戦いの後、カール大帝はローラントの復讐を果たすためスペインに戻ってはいないのである。カール大帝はフランク国の東にあったザクセン族との戦闘のため東へ移動しており、西のスペイン国境に兵力を向ける余裕はなかったようである。

12 Konrad, S.416.

1-2-6. ガヌロンを裁く決闘裁判

決闘裁判とは、証拠に基づいて判決を下すのではなく、お互いに潔白を主張し合うものが、決闘によって決着をつけ、勝ったものが正しいとする中世的な野蛮で暴力的な調停手段である。この作品でのガヌロンのように、国家に反逆し、自らの利益のためには多くの自国の武将や兵を戦死させるという裏切り行為を働いても、潔白だと主張し、決闘裁判に勝てば、ガヌロンは正しく無罪ということになるのである。ローラントとカール大帝を讃えるために書かれたこの作品では、ハラハラさせる場面を描いたうえで、ティアリヒが勝利し、ガヌロンは処刑されることになるが、もしビナバルが勝っていたらどうなるのであろうか。カールはローラントの角笛を聞いた時、ガヌロンの裏切りを確信し、逮捕させたのだから、この時点でガヌロンの有罪を認識していたと考えられる。ガヌロンが敵軍とどのように密通しているかという詳細は分からないにしても、少なくともガヌロンをマルシル王の所へ派遣した目的はマルシル王の和平提案が虚偽のものでないかどうかを調査することであったのだから、カール大帝が帰国の途に就いた直後にマルシル王が攻撃をしてきたとなれば、ガヌロンの調査は全く不十分であったということになる。この点を中心にガヌロンの挙動や言動を証人や証拠品から厳しく調べ上げれば、ガヌロンを有罪とすることは十分できたはずであろう。

2. フケー『譚詩、ロンスヴォーの谷』

2-1. フケーの譚詩の概要

フケーの譚詩¹³は10章から構成されており、コンラートの英雄詩のいわばダイジェスト版である。カール大帝のスペイン遠征の始まりとか、ガヌロンの裏切りとか、大筋の事件経過についてすでに読者は知っていることを前提にしているようで、第1章ではいきなりロンスヴォーの戦場における、ローラントとオリヴィエの言い争いが展開される。ローラ

13 Fouqué, Friedrich de la Motte: *Romanzen vom Thale Ronceval*, Berlin (Realschulbuchhadlung), 1805.

ントが援助を求める角笛を吹こうとしないのに対して、オリヴィエはローラントの婚約者である妹のこを取り上げて、「婚約したばかりの妹を無思慮により未亡人としてしまうのか」と問い詰める。しかしローラントは「すぐに降参してしまう意気地のない男」は結婚する資格がない¹⁴、として勇敢に戦うことを選ぶ。作者のフケーは英雄として勇ましく戦うローラントを讃える側に立って、描写をしているような印象を受ける。第2章では敵側のマルシル王の戦う決意が、第3章ではテュルパン大司教が兵士たちを鼓舞する姿が描かれる。第4章ではテュルパン大司教の仲介で、オリヴィエとローラントの角笛をめぐる論争に決着がつき、ローラントが角笛を吹く決意をする。そして第5章ではその角笛オリファントが鳴り響き、異教徒ムーア人の兵士たちがその雷鳴のような咆哮に震え上がる様子が描かれる。第6章では角笛を聞いたカール大帝がローラントの危機を察知するが、ガヌロンはローラントがアブに刺されたか、野ウサギを追いかけて戯れに吹いたものだろうとごまかそうとする。ガヌロンは裏切り者として縛り上げられ、皇帝軍はロンスヴォーに向かって引き返す。第7章では深手を負って目が見えなくなったオリヴィエが、名剣アルトクレール¹⁵で親友のローラントに切りかかるというエピソードが述べられる。ローラントのヴェヌランという兜は頑丈でローラントは無事であった。第8章ではローラントが一人で休んでいると、異教徒兵が一人忍んできて、名剣デュランダルと角笛オリファントを奪おうとした事件が描かれる。ローラントはその異教徒兵を一撃で殺し、名剣が敵の手に渡らないように岩に打ちつけるが、なん度叩きつけても刃こぼれ一つしない。ローラントは剣を神に預けて息を引き取る。第9章も名剣デュランダルに関するその後の経過である。キリスト教軍の将軍たちがローラントの遺体を発見し、悲しみに包まれながら、ローラントの手から名剣を取ろうとしたが、剣はローラントの手にしっかり握られ、誰一人引き離すことができなかった。最後にカール大帝が近づき、涙を流しながら、やっと剣を受け取ることができた。第10章の舞台は戦争が終了したプロヴァンスである。ローラントが野蛮な邪神に対してキリスト教軍を率いて勇敢に戦ったことを示す書物を聖アエギディ

14 A.a.O., S.5.

15 フケーではアンテクララ (Anteclara) となっている。

ウスという僧侶からカール大帝が受け取り、これによってロンスヴォーにおけるローラントの戦いが人々に知らされるようになった、と締めくくられる。

2-2. フケーの譚詩の特徴

フケーの作品はこの拙稿で比較検討する他の作品に比べると、分量的に短く、カール大帝のスペイン遠征の詳しい経過や、ガヌロンがどうして裏切りを働いたかという動機などの説明は省略されている。また戦闘場面も、コンラートのように一人一人の武将の詳しい紹介や、一騎打ちの経過などはほとんど語られていない。フケーの関心は一つにはローラントの一途な英雄精神に、そしていま一つには名剣や兜そして角笛という特別な武器や器具それ自体への愛着に向けられているような印象を受ける。10章のうち、第2、第4、第6章で角笛オリファントが大きく取り上げられ、第7、第8、第9章で名剣デュランダル、名剣アルトクレール、兜ヴェヌランが重要な役割を果たしている。フケーは勇壮な中世的騎士精神への強いあこがれを持っていたと想像できる。

フケーにとってはカール大帝やローラントはキリスト教のために戦った英雄であり、正義の立場に立つものであった。これに対して、異教徒軍はキリスト教軍に敵対する邪悪な存在でしかなく、フケーは、カール大帝時代のスペイン征伐の考え方、十字軍時代のコンラートの「聖戦」意識に基づく宗教観を、19世紀においてもそのまま引き継いでいると言えよう。またガヌロンは裏切りをする動機が描かれていないので、キリスト教軍にありながら初めから性格的に邪悪で、悪魔の世界の一員という役割を果たしているようである。

3. フリードリヒ・シュレーゲルの『ローラント』

3-1. シュレーゲル『ローラント』の概要

Fr. シュレーゲルは『ローラント』の物語詩を1806年に発表¹⁶した。これもフケーの作品と同様に譚詩（Romanzen）として作成され、短い「まえがき」の部分と15章に分けられた本文から構成されているが、一つ一つの章はフケーに比べるとかなり長く、長編詩となっている。内容的には、『ローラント』という題名にもかかわらず、登場人物としてローラントが描かれている部分は比較的少なく、第1章から第6章まではスペイン遠征でカール大帝がいかにか戦い、勝利を収めたかが語られている。第7章でローラントが主役を演じる場面が描かれるが、舞台はロンスヴォーの戦場ではなく、ナゲラという所でフェラクトという巨人と対決するという内容である。第8章と第9章では再びカール大帝率いるキリスト教軍全体の戦いが描かれる。ようやく第10章になって、ガヌロンの裏切りとロンスヴォーの戦いが話題となる。この第10章で、コンラートの作品にあるローラントの活躍の場面が描かれ、ローラントの戦死まで筋の展開は進む。第11章から第15章は、ローラントや戦死した勇士たちのための追悼が主要な内容である。これらの章においても、カール大帝がローラントの戦死について悲しむ様子が詳しく紹介され、カール大帝が殉教者たちを追悼して各地に教会を建設したことが述べられる。そして最終の第15章ではカール大帝自身の最後が描かれるというように、作品全体を通しての主役はローラントではなく、カール大帝であることが明らかである。

16 Schlegel, Friedrich: *Roland, Ein Heldendichtung in Romanzen*, in: *Poetisches Taschenbuch für das Jahr 1806* von Fr. Schlegel, Berlin (Joh. Fr. Unger) 1806. ここでは Schlegel, Friedrich: *Sämmtliche Werke*, Wien (Jakob Mayer u. Co.), 1823, Bd.8 を参考にした（以下 *Schlegel-SW*: Bd.8）。

3-2. シュレーゲル作品の特徴と問題点

3-2-1. シュレーゲルの空想・虚構と執筆姿勢

シュレーゲルはこの作品に『テュルパンの年代記に基づく英雄物語詩』(*Ein Heldengedicht in Romanzen nach Turpins Chronik*)を副題として掲げており、短い「まえがき」にもこの資料を前提にして創作をしたことが述べられている。この資料は *Historia Karoli Magni et Rotholandi* (*Geschichte Karls des Großen und Rolands*、『カール大帝とローラントの歴史』)という12世紀に作成されたものである。『聖人ヤコブの書』(*Liber Sancti Jacobi*) (一般にカリクストゥス写本 *Codex Calixtinus* と呼ばれる資料)の中の文書が、現存する最も古い稿である。この写本は、ローマ教皇カリクストゥス2世によるものとされるが、実際には Aimeric Picaud というフランス人がラテン語で作成したもののようである。この資料に「テュルパンによる年代記」という触れ込みがあるが、カール大帝と同時代のテュルパン司教によるものではなく、テュルパンの時代から400年も後に書かれたもので、『似非テュルパン年代記』(*Pseudo-Turpin-Chronik*)と呼ばれている文書である。シュレーゲルはまことしやかに「年代記」によるカール大帝と英雄ローラントの物語として描いているが、実際の歴史的事実に基づいているとは、到底、思われない。例えばシュレーゲル作品では最後の第15章で、814年にカール大帝が死去したことが述べられているが、794年に死んだテュルパン司教がどうやって814年の記録を書くことができるのだろうか。この他にもこの年代記の最初にカール大帝がスペインのガリシア地方に攻め込み、スペイン全土を配下に収めたという記述があるが、歴史の記録では、カール大帝はピレネー山脈を少し超えたスペイン東部(ナヴァエラ地方)に攻め込んではいないものの、大西洋に面するにスペイン最西部のガリシア地方には全く足を踏み入れておらず、歴史の年代記としてはまったくの虚偽が描かれており、とても「年代記」と見なすことができない虚構の産物である。

一般論として文学作品は歴史書とは異なり、空想や虚構の叙述があっても、それによってその叙述が否定的な評価を受けるものではなく、だ

れも考えつかないようなファンタジーの世界が描かれていても作品としては大いに魅力的で優れたものであると評価され、文学史に輝く場合もありうる。しかしこのシュレーゲルの作品（およびその原本となっている *Historia Caroli Magni*）は、ほとんど空想が生み出した部分によって成り立っているにもかかわらず、歴史的な人物の名前を挙げ、その「年代記」(Chronik) とあたかも歴史的事実であるかのように装うのはどうしてであろうか。前述したように、テウルパンは実在のランスの司教であり、コンラートの作品ではカール大帝のスペイン遠征に加わり武将としても戦う人物として描かれている。もしこのテウルパンの記録が残っているとすれば、この司教の生存期間（748/750—794）からしてオクスフォード稿（1170年頃）よりもずっと古い、カール大帝と同時代の最重要記録として、歴史学や文献学で注目されているはずであろう。しかし21世紀の現在に至ってもそのような文献が発見されたという事実はなく、この「年代記」はカール大帝の時代から数百年後に書かれた虚偽資料であると考えざるを得ない。

シュレーゲルが自分の空想に任せて虚構の物語を創作しようとするならば、何も歴史的な記録に基づくというような副題・前書きを書く必要はなく、例えば夢枕にテウルパン司教が立ち、カール大帝の英雄行為を語ってくれた、というように、虚構であることを正直に書いた方がよかったのではないだろうか。シュレーゲルはこの作品の中で、キリスト教軍は誠実で、正しく、異教徒軍は邪悪で虚偽に満ちていると、強調しているが、シュレーゲル自身が虚偽に基づく『似非テウルパン年代記』を最初の前提として掲げ、まるで正しい歴史書のように述べているのは、誠実さに欠け、読者を偽情報によって丸め込もうとする、一種の詐欺行為を行っていると言えないだろうか。

3-2-2. カール大帝のスペイン遠征の目的

コンラート稿では天使がカール大帝のもとに現れ、スペインをキリスト教化するという神の命令を伝える。シュレーゲルの場合は、大帝の夢に現れるのは天使ではなく、威厳のある大柄の老人であった。大帝がどなたかと尋ねると、老人はキリストの12使徒の一人ヤコブであ

ると答える。ヤコブは「自分の遺体がスペインのガルシア地方に眠っている、この地はサラセン人が支配しているので、これを解放し、キリスト教徒の巡礼の地にせよ」¹⁷と、指令を与える。コンラート稿では一般的にスペイン全体をキリスト教化せよと、神が命令しているのに対し、シュレーゲル作品では、ヤコブのために巡礼の地を確保せよと、かなり限定的な遠征目的が設定される。これは12世紀の『似非テュルパン年代記』が、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼を讃美するために書かれたことによるものである。したがってこの文章に依存しているシュレーゲルも、歴史的にはカール大帝の時代にはまだ存在していなかったこの巡礼路の宣伝する作品を書くことになったのである。

カトリックの宗教伝説によれば、使徒ヤコブはエルサレムで殉教し、その後、遺体はひそかにスペインのガリシア（イベリア半島北西部の大西洋に近い所）に運ばれたとされる。その埋葬地が9世紀前半に「発見」され、この地はサンティアゴ（=聖ヤコブ）と呼ばれ、その後、イスラム教支配のスペインに対抗するレコンキスタ運動の一環として、フランスからピレネーを越えて、イベリア半島の北部を通り、このサンティアゴを目的地とする巡礼の旅が行われるようになった。現在でもこの巡礼地はユネスコの世界文化遺産に登録されるほど、聖地として有名な所であるが、最も古い巡礼の記録は951年のものである。

このサンティアゴを巡礼の地として確立したのはカール大帝であったと、そしてカール大帝がこの地に聖ヤコブのためにまばゆいばかりの黄金の教会を設立した¹⁸と、シュレーゲルは作品第1章の最後に描いているが、歴史的、地理的な状況を考えて、アーヘンを首都とするフランク王国のカール大帝が真っ先にスペインの西の端のサンティアゴを解放するという設定は、実際にはとうてい不可能であり、歴史的な関連性を無視するものと言わざるを得ない。シュレーゲルが描くように、カール大帝が聖ヤコブの墓を聖地としてイスラム教徒から解放し、ここに聖人を記念する大聖堂を建立したのが事実であれば、その後の歴史書にはそのことが記され、サンティアゴの巡礼地の解説には発祥の由来として大きく取り上げられるはずである。歴史的な事実としては、カール大帝は

17 *Schlegel-SW*. Bd.8, S.11 f.

18 *Schlegel-SW*. Bd.8, S.14.

スペイン東北部のナヴァラ地方に攻め込んだが、それ以上西へは進撃できず、この攻撃の報復としてバスク人による追撃があり、ロンスヴォーでローラントたちの敗北した戦争があったと伝えられている。時間的な経緯としても、9世紀になって埋葬地が発見されたという事実を、8世紀のカール大帝のスペイン遠征と結びつけるのは強引と言えよう。キリスト教徒のサンティアゴ巡礼が盛んになったのは11世紀にナヴァラ王国が回教徒の「後ウマイヤ王朝」と対抗するために、親キリスト教の政策を取ったことが大きな要因であって、カール大帝がこの地を征服したという事実はない。さらにサンティアゴの大聖堂は1075年に建設が始まったものであり、この大聖堂とカール大帝との関連はないと考えられる。

3-2-3. シュレーゲルの描くローラントの活躍

シュレーゲルの作品の第7章ではローラントの活躍が描かれている。これはコンラート稿には全く描かれていない内容であるが、『似非テュルパン年代記』には取り上げられており、シュレーゲルはほぼその内容を引き写している。聖書「第一サムエル記」第17章に少年時代のダビデが巨人ゴリアテと戦ったことが記されている。ゴリアテは身長が6キュビト半（約2.9m）もあるペリシテ人の巨人兵士で、イスラエル軍にとっては恐ろしい強敵であった。しかしイスラエル軍を代表してダビデは鎧も兜も身につけず剣も槍も持たずこの巨人に立ち向かう。ダビデは投石機で石をゴリアテの額にめり込ませ、これを倒すのである。

シュレーゲルの作品（そして『似非テュルパン年代記』）では、ナハラの地でカール大帝軍はフェラクト（Ferracut）という巨人と戦う。この巨人はバビロンの生まれで、ゴリアテの血縁にあたるという設定で、身長は12エレ（約6m）あり、力は40人分もあったとされる。キリスト教軍のオジエ、ライノルト、コンスタンティンらの武将が戦いに挑むが、これらの歴戦の勇士たちも「小さな子羊を抱えるように」異教徒軍の城や塔の中へ連れ去られ、閉じ込められてしまった。ローラントは我慢できず、ようやく皇帝の許可を得て、巨人と戦う。屈強なローラントはこの巨人と互角に渡り合う。その日は日没となり、夜は休息を

とって、翌日、朝日が輝くと、戦いが続けられた。その日も昼まで戦い続けたが、決着がつかず、昼の休憩をとるため一時休戦となった。巨人は草原で眠り込んでしまうが、休戦の約束をした以上、誠実なローラントは眠っている相手を攻撃しなかった。巨人が目を覚ますと、しばらくの間、二人の間で話し合いが行われる。ローラントが剣で巨人の体をとらえているのに、どうして傷つかないのかと尋ねると、巨人は「自分の体は固く、へそ以外は不死身なのだ」¹⁹と答える。次に宗教に関する論議が展開され、巨人は「三位一体」、「処女懐胎」、「キリストの復活」という3点で、キリスト教に疑問があると主張する。これらについてローラントは回答を与える。巨人はそれに反論はしないが、どちらの宗教が正しいか、戦いで決着をつけようと、再び決闘が始まる。最後には、ローラントは巨人にねじ伏せられるが、すばやくベルトから短刀を引き抜き、相手の急所であるへそを突き刺し、巨人の息の根を止めた。

ローラントのすばらしい活躍で、キリスト教軍は勝利し、めでたしめでたしとなるのではあるが、この筋の展開にはいくらか問題があるのではないだろうか。第1に、ローラントの剣はデュランダルという名剣で、大理石よりも強く、どんな相手でも切り倒すことができるはずではなかつたらうか。その名剣で切っても巨人の体は傷一つつかないということになれば、名剣にとっては大いに不名誉な場面が描かれていることになろう。また、休憩時間に巨人が眠り込んだときに、ローラントが攻撃しなかったことが、いったん結んだ約束を破らない誠実な騎士の美談として讃えられているが、巨人の体が不死身であれば、眠っていてもこれを傷つけることなど不可能であろう。巨人は昼寝中に剣で攻撃されても平気だと分かっている、悠然と眠っていたということになる。相手が眠っていても手も足も出ないということであれば、これを美談として讃美する価値も半減してしまいそうである。第2に、休憩時間に巨人が決闘の相手に「自分の急所はへそ」だと教えるのは常識的にあり得ないことであろう。よほどこの巨人は間が抜けているのであろうか。虚構としての物語を書いているわけだから、このように安易に相手の弱点についての情報をローラントに得させるのではなく、もう少し工夫する方が

19 Schlegel-SW. Bd.8, S.51.

読者に対して説得力を与えることができたのではないだろうか。聖書のダビデの場合は、相手の巨人が予測していなかった投石器という新兵器で相手に勝利した。またシュレーゲル作品第1章では、3か月も難攻不落であったパンペロナの城壁を前に、カール大帝が聖ヤコブに祈りをささげると、頑丈な石垣が地割れを起し崩壊したことが述べられている。ローラントと巨人との決闘の場合も、何らかの新兵器を使うとか、祈りの奇跡で天使か聖人から巨人の急所についての情報を得るとかした方が、演出としては優れた作品になったのではなかろうか。

3-2-4. ローラントの宗教論争

シュレーゲル作品第7章では、ローラントと異教徒側巨人フェラクトとの決闘における休憩時間にキリスト教に関する宗教論争が展開される。フェラクトが疑問視するのは、「三位一体」、「処女懐胎」、「キリストの復活」という3点である。シュレーゲルはローラントが「剣によっても口によっても、愛する神のために戦った」²⁰と述べて、武力だけでなく宗教論争でもローラントがりっぱな功績を果たしたと評価している。その内容についてここで検討しておきたい。

第1点の「三位一体」であるが、異教徒の巨人は絶対的な神は一つだけで十分なのになぜ三つもあるのかと素朴な疑問を提起する。ローラントは豎琴、太陽、アーモンド、車輪の例を挙げて、三つの構成要素が一つにまとまって大きな働きをしていると主張する。豎琴では、弦と手と技巧の三つが一つの音を奏でる、太陽では、光と熱と巡行がまとまって一つの役割を果たす、アーモンドは、種と皮質と殻の三つがまとまっている、車輪では軸（ハブ）と外輪（リム）と輻（や）（スポーク）の三つがあって一つの働きをする、というわけである。三つの構成部分がそれぞれ協力しあって一つの働きをすることはこれらの例でも理解できるが、この説明だけで、これらの例示が天地創造をはじめ数々の奇跡を起こす神秘的な神、キリスト、精霊と対応しているとするのできるのだろうか。アーモンドはどういう点で神でありキリストであり精霊なの

20 Schlegel-SW. Bd.8, S.53.

だろうか。ローラントが挙げた四つの例が、聖書で述べられている神、キリスト、精霊の叙述とどのように関連しているか、また神、キリスト、精霊がそれぞれどのような相互関係にあるのかという説明がなければ、納得することは困難であるように思われる。

第2点の「処女懐胎」について、シュレーゲル作品のローラントは農夫が種をまかなくても、5月になると自然の中で花が咲くのと同じだと言う。また夏には深い沼で虫たちが活動を始めるのも同じだと主張する。12世紀の『似非テュルバン年代記』の時代には、まだ生物学が発達していなかったので、このような説明もやむを得ないのかもしれないが、19世紀初頭においてシュレーゲルのような知識人が生物の生殖活動について何も知らなかったのであろうか。ダーウィンの進化論（『種の起源』1859年）やメンデルの遺伝論（1865年）はシュレーゲルの時代にはまだ存在していなかったとしても、例えばリンネはすでに『植物の種』（1753年）を発表しており、哺乳類と他の動物との区別など、植物、動物の種の区別を系統的に分類している。花を咲かせることが多くの植物にとっては生殖活動であり、虫たちにもオスとメスの区別があることをシュレーゲルは分かっているようである。植物が5月に花を咲かせるように、夏に虫が沼で「自然に」湧き出るように、人間の乙女が「自然に」子供を出産すると言われても、生物学が発達した時代の人々にはあまり納得しないのではないだろうか。マリアの懐胎が植物や動物の自然とは異なり、神の力が発揮された特別な奇跡であることが示され、その宗教性・特殊性が説明されなければ説得力があるとは言えないであろう。

第3点のキリストの復活であるが、シュレーゲル作品では、ローラントは太陽が夕方になると沈むが、次の日になると再び空に昇って来るのと同じだと説明する。いったい人間の生命と天体の活動を同じ基準で考えることができるのであろうか。死んだ人が次の朝に太陽が出るように生き返るのであれば、地球上はすぐに人で埋め尽くされてしまうのではないだろうか。

以上のように、ローラントによるキリスト教弁護の主張は、子供だましのようなレベルで、あまり説得力がないように思われる。

3-2-5. ロンスヴォーにおけるローラントの殉教

ロンスヴォーの戦いにおける経緯はシュレーゲル作品の第10章にまとめられて述べている。ほぼコンラート稿を引き継いでいるが、シュレーゲルがいくらか変更している点もある。主な点を挙げれば次の通りである。

(1) コンラート稿ではスペインの王である異教徒のマルシル王がカール軍に追い込まれ、サラゴサに包囲され、軍事的な劣勢を打開するために、虚偽の和平提案をマルシル側が考え出しカール軍へ使者を派遣し、これを確かめるためにガヌロンがマルシル王の城へ行くという設定である。しかしシュレーゲルの作品においては、すでにカール軍はスペイン全土を支配しており、そこへ回教徒側から送り出されたマルシル王がバビロンからサラゴサへやって来て、新たにここを支配するようになった。そしてカール大帝側の方から、この新しいマルシル王に、カール大帝への服従と、キリスト教への改宗を要求して使者のガヌロンを送り込むのである。この危険な使者の指名をめぐるローラントとガヌロンが対立する場面はない。ガヌロンがローラントやカール大帝への恨みや復讐心を持つ場面は設定されず、ガヌロンは生まれつき性格的に邪悪で卑劣であるため、そして異教徒側から金品をかすめ取るために裏切り行為に走るのである。

(2) ガヌロンの報告で、マルシルが服従し、キリスト教の洗礼を受けるといっているので、カール皇帝は帰国の途に就き、守備隊をローラントに任せ、そこへ大軍のマルシル軍が襲撃してくるが、コンラート稿に描かれているような、救助の角笛を吹くかどうかでのローラントとオリヴィエの言い争いはない。異教徒軍は残忍な方法でキリスト教軍を殺害し、ローラント軍は劣勢になるが、ローラントは自分の判断で角笛を吹き、ローラント自身が異教徒王のマルシルを殺し、異教徒軍は逃亡する。ローラントも4本の槍に突かれ重傷を負う。異教徒軍に名剣デュランダルが渡らないように固い石にたたきつけたが、剣は傷つかなかったという場面が描かれたのち、ローラントは力尽きて、天に「悔悛、希望、信仰、贖罪」の祈りを捧げ死ぬ。

(3) 第12章になるが、ガヌロンの決闘裁判が行われる。カール大帝はサラゴサの異教徒の城を攻略して、ローラントの復讐を果たしたの

ち、その場で裏切り者ガヌロンの裁判を行う。コンラート稿ではフランク国の首都アーヘンに帰ってからこの裁判が行われることになっているが、シュレーゲルは裏切り者をそこまで生かしておく必要はないと考えたのであろう。しかし決闘裁判の形式と経過はコンラート稿とほぼ同じであり、皇帝側はディートリヒ（ティアリヒ）が、ガヌロン側はピナベル（ピナベル）が代表として決闘し、皇帝側が勝って有罪が確定し、ガヌロンは4頭の馬につながれて四つ裂きにされた。

3-2-7. シュレーゲル作品のまとめ

フリードリヒ・シュレーゲルはカトリックへの信仰心を強く抱くようになった時期にこの作品を書いたようである。十字軍時代のコンラート稿の「聖戦思想」をほぼそのまま引き継ぎ、『似非テウルパン年代記』を踏まえて、カール大帝のキリスト教拡大のための戦いを讃美し、ローラントの殉教を美化している。そのキリスト教勇士への肩入れぶりと、異教徒に対する嫌悪感は全編にわたって貫かれている。「美しい」、「善良な」、「誠実な」、「勇敢な」、「敬虔な」というような感情的で主観的な形容詞がキリスト教の勇士たちを描くときにはふんだんに用いられ、他方、異教徒や裏切り者を描くときには「卑劣な」、「邪悪な」、「意気地ない」という形容詞があふれる。18世紀のレッシングが『賢者ナータン』で描いたような、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教という三つの宗教の宥和や、立場の違いを超えた寛容の精神、個人の自覚という近代市民社会の原理が19世紀のシュレーゲルにおいては排斥され、中世的キリスト教讃美が展開される点では、明らかにこの作品は時代錯誤のように思われる。

4. インマーマン『ロンスヴォーの谷』——キリスト教的・中世的騎士讃美から個人的恋愛への主軸の転換

コンラートの『ローラントの歌』、そしてフケーとシュレーゲルの作品では、異教徒に対するキリスト教軍の戦いが「聖戦」として美化され、その推進者であるカール大帝とローラントが英雄として讃美されて

いる。これに対してインマーマンは個人的恋愛を前面に出して筋を展開する。コンラートの場合もキリスト教軍の主要な登場人物も敵軍の武将も、歴史的な事実から離れ、多くの場合、虚構であった。インマーマンは古い武勲詩の登場人物を焼き直しながら、あらたにまったく別の登場人物を設定している。インマーマンの大きな改変はキリスト教讃美から、個人的恋愛へと作品の主軸を移していることである。しかもその恋愛はキリスト教側の英雄ローラントと回教徒側のマルシル王の娘ソライデとの間のもので、戦争での対立と宗教の違いを越えたまったく異次元の恋愛なのである。この恋愛を成立させるため、インマーマンは登場人物において、また恋愛関係での経過において、コンラート、フケー、シュレーゲルとは大きく異なる設定をしている。

4-1. ローラントとソライデの恋愛

4-1-1. ローラントとソライデのなれそめ

コンラート、フケー、シュレーゲルの場合はいずれもキリスト教側からの聖戦という立場なので、裏切り者のガヌロン以外のキリスト教徒の登場人物は全員善良で誠実であり、一方、異教徒側は策略ばかり弄する陰險な悪者として描かれる。しかしインマーマンの場合はキリスト教軍の中にもガヌロン以外にもごろつきのような兵士が描かれ、また異教徒側にもソライデのような自立心のあるまじめな人物が登場する。それにしても、敵対する軍のそれぞれのほぼ頂点に立つローラントとソライデの間に恋愛が始まるということなどはほとんど不可能と思われるが、インマーマンは工夫をめぐらせて、ロンスヴォーの戦い以前の時点から、二人が接近した過程を描いている。インマーマンの設定によれば、カール軍がスペインに遠征した時、異教徒側の内部では東スペインのマルシル軍と西スペインのアグラメント軍が対立していて、マルシル軍はカール軍に加勢を求め、カール大帝は異教徒側の戦法を知る機会なので、その要請に応じてマルシル軍と共同でアグラメント軍に対して戦ったのである。コンラートのようにキリスト教の聖戦を主張するのであれば、カール軍が異教徒軍と共に戦うということなどありえないのであるが、

インマーマンは十字軍思想から離れているので、自由な発想でそのような設定をしたのであろう。そうした共同戦線の中でローラントはオリヴィエと共にフランク軍の使者としてマルシルの居城を訪れ、宴会の席でソライデと知り合うのである。オリヴィエの報告（第1幕第2場）によれば、ソライデは「初々しい五月の春」のように美しく、「知の女神ミネルヴァが美の女神ヴェーヌスに変身したようだった」²¹ということであり、それ以後、ローラントは恋に悩むようになる。またこの時の出会いがソライデにも、ローラントに対する恋心を生み出したようである。

4-1-2. 戦場に登場するソライデ

その後、西スペインのアグラマンの勢力は後退し、今や、マルシル軍とカール軍が激突することになり、サラゴスの周囲で戦闘に突入した。マルシル軍は不死身のフェラグスと王女のソライデが率いている。第1幕第5場で、フェラグスはカール王と刃を交え、剣を奪われるが、妖術により不死身の体なので、殺されることなく逃亡する。次に武装したソライデがローラントに切りかかるが、ローラントは相手がソライデであることを見抜き、「私は女とは戦うつもりはない」とまじめに取り合わない。ガヌロンがソライデに切りかかるが、ローラントは「手を出すな」と言ってガヌロンを制止する。そのすきにフェラグスはガヌロンの剣を奪い、ソライデと共に逃亡する²²。ギリシア神話のアマゾンから、ブリュンヒルトやジャンヌ・ダルクなど西洋には武力にすぐれた女性たちが活躍する言い伝えがある。しかしイスラムの世界は21世紀の今でも女性の解放が進んでおらず、カール大帝の時代に軍を率いて戦う王女がいたかどうかは大いに疑問である。おそらく若いインマーマンはイスラムの歴史的な考察を厳密にするよりも、19世紀の個人主義の立場から女性にも活躍する場を与えなかったのだと思われる。ソライデが登場して最初に語る場面で、「自分は平和を求めるものであり、早くこの戦闘を終わらせたい、ローラントのような立派な武将に切られて死ぬので

21 *Trauerspiele*, S.30.

22 *Trauerspiele*, S.39 f.

あれば幸せだ』、という趣旨の発言²³をする。このような言動から、ソライデはフェラグスのように回教徒の利益のために徹底的に戦う戦士ではなく、むしろ回教徒とキリスト教徒の和解を願っており、またローラントに対して恋心を抱いていることが示されている。

4-1-3. ローラントとソライデの密会の準備

劇の展開はここからはコンラート稿と同じように、マルシル側が虚偽の和平提案を出し、ガヌロンが裏切りを図るという風に進むが、その交渉の間、両軍はサラゴス周辺でにらみ合いの状態が続いている。こうした敵対する両軍の陣営をぬって、ローラントとソライデの関係は発展し親密さを増す。第3幕ではソライデは召使のスレイマと共に宮殿を抜け出し、森の中の魔術師マグスの所へ行く。マグスはソロモンの知恵を身につけ、天文学や自然の親和性について熟知した予言者である。ソライデはマグスに恋の行方を占ってもらうため、人目を忍んでこっそりと夜道を通り、会いに行くのである。その恋占いでは吉と出たようで、ソライデは喜ぶ。召使のスレイマはマグスに描いてもらったソライデの似顔絵の紙をもって、今度はフランク軍の陣営の中に入り込み、ローラントを探し当て、似顔絵を見せて、この女性がお会いしたいので一緒に来てほしいと要請する。ソライデの愛情とマグスの魔術を用いた似顔絵とが効果を発揮し、ローラントはその似顔絵に接吻する。すぐにローラントは外套をかぶって、スレイマと共に陣営を抜け出し、サラゴサ王宮の女王の部屋へと向かう。

インマーマンはここできわめて大胆な筋書きを展開している。一つは異教徒側の魔術師に肯定的な役割を与えていることである。コンラート稿など伝統的なキリスト教の考えにおいては一神教であるキリスト教の神こそが予言をするのであり、その意思は天使によって人間に伝えられるのである。マグスのような異教徒の魔術師で、予言や占いをするのは邪教に仕える者であり、悪魔の手先とされるはずである。この点でインマーマンはキリスト教の絶対化という中世的な考えから完全に脱却し

23 *Trauerspiele*, S.38 f.

ているといえよう。

もう一つ大胆な展開は、サラゴサがフランク軍に包囲されている中で、王女が城を抜け出し、森の中の魔術師の所へ行き、さらに王女の召使が敵軍の陣営の中枢に入り込みローラントに会うこと、そしてさらにローラントは自軍の陣営を抜け出し、敵軍の王宮の王女の部屋へ忍び込むという、この作品の主役たちの信じられないような行動である。平時であっても居城や軍の司令本部は警戒が厳しく、当然、何重にも監視の体制が取られているであろう。まして今は軍事対立してお互いに武器を構えて対峙している陣営である。その監視・警戒の網をぬって両陣営の重要人物が内密に行き来することは、現実的に見れば全く不自然ではあるが、愛の力はそのような規制をもともせず、武力よりも強いということであろう。

4-1-4. ローラントとソライデの密会

第4幕でローラントとソライデがサラゴサの王宮の中で密会する。二人はお互いに愛し合っていることを言葉に出して確認する。ソライデは戦場から抜け出し、二人で船に乗って海を渡り、平和の楽園マヨルカ島へ行きたいという願望を語る。このソライデの思いは回教徒という宗教的立場も捨て、キリスト教徒と戦うという軍事的使命も放棄し、さらに王女という地位も投げ出し、純粋に個人としての愛を貫こうとするものである。これに対してローラントは愛の魅力に惹かれながらも、キリスト教戦士として異教徒と戦う使命感から抜け出すことはできず、悩む。続いてソライデは、回教国にかつてやって来たキリスト教の司祭からキリストの教えを学んだことがあり、その教えは正しいものだと思うと言う。こうして宗教問題ではソライデからの歩み寄りがあったものの、まだ軍事的な対立の壁は残されていた。その時、サラゴサ城内が騒がしくなり、二人は記念になる品を交換する。ソライデはバラの花を、ローラントは胸の十字架を相手に渡し、急いで別れる。

この場面で目立つのはソライデの現代的な個人主義の立場である。これに対してローラントはキリスト教を捨てることも、軍人としての職務を放棄することもできない。ローラントというキリスト教のために殉教

した人物をキリスト教から逃亡させることは、いくらインマーマンでも不可能な想定なのであろう。ローラントを素材に選んだ以上、インマーマン自身もキリスト教の神を否定して無神論になることは考えていないようである。ソライデと同様に、ローラントも宗教と軍人の職務を捨てて二人でマヨルカ島へ逃げ出すという設定にすれば、二人の間に平等の立場が貫かれるのに、インマーマンはそこまでは徹底していない。

4-1-5. 戦場でのローラントとソライデの結婚

第5幕では、カール大帝は帰国の旅に立ち、ローラントがロンスヴォーの谷で総司令官として軍を統率している所へ、ガヌロンの裏切りによって大軍のマルセル軍が攻めようとしている。そこへソライデ王女が城を抜け出し、異教徒軍よりも早く駆けつけ、ローラントに和平提案が虚偽で、異教徒軍が裏切り、総攻撃を企てていることを知らせる。ソライデはテウルパン大司教から岩場の泉で洗礼を受け、洗礼名はマリアとなった。続いてこの大司教のもとでローラントとマリア（ソライデ）は結婚をする。その後、ローラント軍はマルシル軍と戦闘することになる。コンラート稿のように、角笛を吹くかどうかでローラントとオリヴィエが言い争う場面はなく、インマーマン作品ではローラントは自発的に角笛を吹き、それがカール大帝の耳に届くという設定になっている。つまりここではローラントが状況判断において拙稚であることや、武力に過信しているということではなく、冷静さを保った総司令官として描かれている。しかしオリヴィエは戦闘で傷つき、ローラントも角笛を吹いて出血して倒れる。そこへカール大帝の軍が戻って来る。ローラントは勝利を確信して死ぬ。カール大帝はマルシル王を討ち殺し、ローラントの復讐を果たす。カール大帝は異教徒軍の捕虜をキリスト教徒にして改宗させて釈放し、マリアをスペインの女王に任命する。

インマーマンの作品ではローラントとソライデの恋愛を描くのが主題なので、コンラート稿のように戦闘場面を一人一人の武将ごとに詳しく描くことはなく、当然のことながらパリガン軍とフランク軍との全面戦争は設定されていない。またガヌロンも逮捕される場面で終わっており、中世的な決闘裁判は削除されている。

ところでインマーマンは裁判官が本職であり、法律の専門家なのだから、サリカ法典 (Lex Salica) を知っていたと思われるが、ここでは女性が王位に就くことは禁じられているはずなのに、このマリアの場合はスペインの女王になるという設定で、サリカ法を無視しているように思われる。歴史的な例を挙げれば、インマーマンの生存中の1837年にドイツのハノーファー国で国王ヴィルヘルム (イギリス国王と兼ねていてイギリスではウィリアム4世) の死後、イギリスではヴィクトリア女王が即位したのに対し、ハノーファー国ではフランク王国に由来するサリカ法の伝統を受け、ヴィクトリアの叔父のエルンスト・アウグストが国王となった。この国王が憲法を撤回し、それに抗議したグリム兄弟などのゲッティンゲン七教授を罷免したことはよく知られている。インマーマンは、スペインがイギリス同様にサリカ法の適用範囲ではないと考えていたのであろうか。あるいはインマーマンはサリカ法を承知の上で、女性の地位向上を考えて、あえてマリアを女王に設定し、サリカ法の問題点に対し、疑問を投げかけたのかもしれない。

4-2. 裏切り者ガヌロンとカール大帝の責任

インマーマンの作品ではローラントとソライデの恋愛を描写することに力を入れ過ぎたのか、ガヌロン、ローラント、カール大帝の関係があいまいで、場面ごとに矛盾した描き方をしている部分もある。コンラート稿でも実際の歴史的な人物ではなく、創作上の人物が登場しているので、インマーマンのような後の世代の作者が、登場人物の間柄を変更しても構わないであろう。コンラート稿では、ローラントはカールの妹の子供で、カールから見れば甥である。ローラントの父親の名前は挙げられていない。この父親が死別したかどうか書かれてないが、母親はガヌロンと再婚している。したがってガヌロンはローラントの義父であり、カールの義弟である。

ところがインマーマンの作品では、ガヌロンはローラントの Bruder (兄弟) とされている (第1幕第1場²⁴など)。そしてどちらが年上かに

24 *Trauerspiele*, S.18.

つについては何の説明もない。日本語に訳すときは「兄」か「弟」かはっきりさせないと不自然なので、翻訳者泣かせの言葉であるが、ガヌロンが老獪な策士で、ローラントは若々しい武将として描かれているので、状況判断から本稿ではガヌロンを兄、ローラントを弟と設定することにする。第3幕第8場で、カールがローラントを「甥」(Neffe)²⁵と言う場面もある。この発言からすると、父のオルトヴァインはカールの妹と結婚していたことになる。またローラントとガヌロンが兄弟であれば、ガヌロンも甥ということになろう。もっとも二人が異母兄弟であれば、ガヌロンは甥ではない可能性もある。ところが第4幕のソライデの恋の逃避行の提案に対して、ローラントが反論する場面では、ローラントは自分のことを「国王の従弟」(Des Königs Vetter)²⁶と呼んでいる。この国王はカール大帝以外に考えられないので、ローラントの親とカールの親が兄弟姉妹ということになる。歴史の資料によるとカールの両親はピピン3世(714-768)と妻のバルトラダであるが、カールは正妻の子ではないという説もあり、カールの両親の兄弟姉妹となると、婚姻外の子供も多いようなので、その中にオルトヴァインかその伴侶がいたかどうかは不明である。いずれにしてもオルトヴァインが父でローラントとガヌロンが兄弟であるという設定は、インマーマンが考え出したフィクションに違いないので、歴史的な資料と照合することはできないであろう。しかしインマーマンが一つの作品で、「甥」としたり「従弟」としたりと、不統一な関係を挙げるのは明らかに誤りであろう。インマーマンが急いでこの作品を仕上げ、十分な推敲をしなかったことは明らかである。

4-2-1. ガヌロンの裏切りの原因

コンラート稿においては、ローラントがガヌロンをマルシルのもとへ派遣される使者に推薦し、そのことを根に持ってガヌロンはローラントを恨み、殺害する決意をし、マルシル側と密通してフランク軍を裏切る。しかし前述したように、このガヌロン指名は、武将の会議でマルシル側へ誰かを派遣することが決まり、誰にするかと問われて推薦したも

25 *Trauerspiele*, S.95.

26 *Trauerspiele*, S.112.

のであり、この推薦だけでローラント殺害を決意するには根拠が薄弱だと思われる。

これに対してインーマンは十分に説得力のある根拠を設定する。ダーゴベルトという情報通の話として次のようなエピソードが語られる(第1幕第1場)。スペイン遠征前のマインツにおける武将たちの集まりで、ガヌロンはカール大帝に弟のローラントと比べると、自分が冷遇されていると訴えた。「弟のローラントはロワールの城に納まり、他の武将たちも封土を与えられているのに、自分には所領地も与えられず、収入もなく、パンを求めて物乞いをしなくてはならない。カール皇帝の少年時代の教育係であった父オルトヴァインの一人の息子(ローラント)が贅沢三昧の暮らしをし、もう一人の息子(ガヌロン)が飢えに苦しむのは理不尽ではないか」と。これに対してカール大帝は、「次にわが国が獲得する領土をガヌロンに封土として与える」と、国王として誓約したのである²⁷。つまりスペイン遠征で、スペインを征服すればスペインの王位はガヌロンに与えると、他の武将たちの前で約束したのである。

ここでガヌロンは封土を与えられずに、収入もないとされているが、一方で、インーマンはコンラート稿の設定を継続し、ガヌロンをマインツ公(Ganelon von Mainz)と呼んでいる。マインツ公という以上、マインツを支配していると思われるが、それでも所領地を与えられていなかったのだろうか。紛らわしく分かりにくいのが、インーマンはコンラート稿にある名前をそのまま受け継いだので、不徹底な部分が生じたということであろう。

インーマンの劇では、アーヘンで国王がガヌロンに新領地を約束してから月日もたち、スペインへの攻撃が進み、スペインの獲得が現実的なものとなると、カール大帝はこの約束を実行しない。サラゴサのマルシル王が虚偽の和平提案を伝えてくると、その真偽を確かめるためのマルシルへの使者は、カール大帝がガヌロンを指名する。そして和平によって獲得したスペインの王位にはローラントを就任させる決意をする。したがって、インーマンの場合にはスペインの王位をめぐる、ガヌロンはローラントと敵対することになるのである。このような国土の

27 *Trauerspiele*, S.18f.

支配権をめぐる対立をすることの方が、単に使者に指名されたことを恨むよりも、はるかに現実的で説得力のある展開であろう。インマーマンの作品では、ローラントがガヌロンを使者に指名する場面はない。カール大帝が直々にガヌロンに使者の任務を言い渡すのである。テュルパン大司教が、カール大帝にガヌロンに次の領土を与えると約束したことを取り上げ、次期国王を使者とするのは国王の威厳を損ねる由々しき問題だと注意を促しても、カール大帝は「ガヌロンは統治の器量に欠ける」(第2幕第4場)²⁸として、ガヌロンとの約束を反故とし、ローラントをスペイン国王に就任させる。ローラントに比べて冷遇されてきたので、妬みはあったとしても、ローラント殺害を決意するほど、ガヌロンは直接的にローラントから攻撃的な言動を受けたわけではない。ガヌロンが報復を考える理由は、これまで冷遇してきたカール大帝を恨み、またスペイン王の約束を反故にしたことである。このように国王としての約束を破ったという点でカール大帝の責任が問題にされるのである。

コンラート稿ではカール大帝は無誤謬の絶対的な「聖人」として美化されているが、インマーマンはカール大帝が無思慮な約束をし、それを後から反故にしたという点で、カール大帝の誤りと責任をはっきりと示しているのである。このため、ガヌロンの裏切りはローラントを殺害することが主たる目的ではなく、カール大帝のフランク軍に大きな痛手を与えることにその矛先が向けられていたといえよう。

4-2-2. カール大帝の誤り

インマーマンの作品でも、ガヌロンがフランク軍の使者としてマルシルの城へ行き、敵軍と結託して裏切りを働き、カール大帝の所へ戻って敵軍の和平提案は信頼できるものだと報告するのは、コンラート稿と基本的には同じである。ただし、相手側の使者の名前はブランカンドランではなく、バルティエルと異なっていたり、また異教徒の偶像の前でガヌロンとマルシル王が誓いをたてるという宗教的な儀式的場面は削除されていたりするなど、若干の違いはある。

28 *Trauerspiele*, S.68.

和平が合意され、カール大帝がフランク国へ帰国するため、軍隊を引き揚げようとしたとき、テュルパン大司教がガヌロンの挙動が怪しいので、反逆罪のかどで調査すべきだと主張する。このとき人の良いローラントが「わが兄はけがれなく、和平は真実です」²⁹と発言して、ガヌロンの窮地を救う。この後、カール大帝は軍と共にサラゴサ包囲の地からフランク国へ向けて出発し、ローラントとその軍はロンスヴォーの谷まで一緒に行軍して、そこで大帝の一行と別れた。コンラート稿では、保身を図るガヌロンは危険な戦場を離れ、カール大帝に同行し、その後、ローラントの角笛が聞こえた時も、ウサギを追っているだけだとごまかそうとして、カール大帝の怒りを買って、逮捕される。これに対してインマーマンの劇では、ガヌロンはカール大帝軍に同行するのではなく、もう一度、マルシル陣営へ行き、カール大帝がスペインを離れ、ザンクト・ヨーハンへ行軍中であると、報告する。そしてロンスヴォーの戦いにおいて、ガヌロンはマルシル陣営に留まっているのである。このようにガヌロンは裏切り者としてはっきりと敵陣に入り、ローラントやカール軍と戦う立場を鮮明にするのであるから、ある意味では一貫性が取れているといえようし、ローラントだけではなく、カール大帝への敵意をはっきり示しているといえよう。

ローラントの角笛を聞いたカール大帝はロンスヴォーへ戻って来て、マルシル王を切り捨て、異教徒軍を降伏させる。敵将のフェラグスらとともに、敵陣にいたガヌロンはフランク軍に逮捕される。カール大帝はフェラグスにはマリア女王への忠誠を誓わせ、敵軍の捕虜たちもキリスト教徒に改宗させ釈放する。しかしガヌロンは逮捕されただけで、どういう処分がなされたのかは作品の中では書かれておらず、不明である。カール大帝自身は、アーヘンでの約束を破ったことで、ローラントら多くの将兵が犠牲になったことを反省し、「コンポステラの修道院」に入りたい³⁰と発言する。これは願望を語っただけのものかもしれないが、カール大帝は自らの誤りをはっきりと認めているのである。カール大帝をキリスト教の「聖戦」の絶対的な推進者として描くコンラートの立場とは全く違った観点に立っていることを、インマーマンはこの結末で示

29 *Trauerspiele*, S.124.

30 *Trauerspiele*, S.152.

そうとしているのであろう。

デーティエンは、国王がいったん約束したことを後から取り消すという設定に関して、インマーマンは国王描写の正しい立場を踏み外している、と批判している。すなわち、シェークスピアの『リア王』、ゲーテの『イフィゲーニエ』で示されている本来の国王のあるべき姿とは外れているとして、この二人の大作家の例を「規範」として挙げ、文学作品においても国王は約束を必ず守る人物として描かなければならないと、インマーマンの誤りを指摘している³¹。この批評は1904年に書かれたもので、デーティエンはまだ古い王党主義の考えに縛られているようである。国王がいったん約束したことは重大であるという主張はもっともであるが、国王であっても様々な事情から誤った判断をすることは歴史を見てもいくらでも起こりうることである。むしろいったん下した判断に固執するよりも、情勢の変化に対応して、修正した方が国や社会にとって好ましい場合もありうるであろう。自由な発想から創作される文学作品においても、国王の判断を絶対化することなく、柔軟に扱うことも許されるべきではないだろうか。こうした点で、デーティエンのように国王全能説を取らず、カール大帝のような神格化された人物でも間違いを犯すこともあるとしたインマーマンのこの作品は、古い権威主義から脱皮した近代的な文学作品の表れとしてむしろ評価すべきではなかろうか。

31 Deetjen, a.a.O., S.38.

Über Karl Immermann: *Das Thal von Ronceval*

Yukihiko Usami

Das Thal von Ronceval ist eines von drei Stücken in Immermanns früher Veröffentlichung *Trauerspiele* (1822). In der vorliegenden Arbeit versuche ich, die Charakteristika dieses Werks zu erforschen, indem ich es mit dem *Rolandslied* des Pfaffen Konrad, den *Romanzen vom Thale Ronceval* von de la Motte Fouqué und dem *Roland, Ein Heldengedicht in Romanzen* von Friedrich Schlegel vergleiche.

Der Pfaffe Konrad schrieb im 12. Jh. nach der Vorlage des altfranzösischen Versepos *La Chanson de Roland* sein Heldengedicht *Rolandslied*, welches die Schlacht von Ronceval im Jahre 778 darstellt. Diesem Werk, das im Zeitalter der Kreuzzüge entstand, liegt die Idee des „heiligen Krieges“ zugrunde, der zufolge die Anwendung der Gewalt für die Ausdehnung des Christentums gerechtfertigt sei und das Leben und Eigentum der Heiden vernichtet werden könne. Hier werden Karl der Große und Roland als ideale Krieger und starke Förderer dieses „heiligen Krieges“ verherrlicht. Insbesondere wird Roland als „Märtyrer“ verehrt, der sich unter Christen einen hohen Ruf verschaffte, weil er in der Schlacht sein Leben geopfert hatte.

Fouqué veröffentlicht 1805 seine *Romanzen vom Thale Ronceval*, die als eine verkürzte Version von Konrads Heldengedicht betrachtet werden können. Er hält Karl den Großen und Roland für die heldenhaften Personen, die für das Christentum kämpften und auf der Seite der Gerechtigkeit standen. Auf der anderen Seite ist für Fouqué die heidnische Armee nur eine böse Erscheinung, die der christlichen Armee feindlich gesinnt ist. So kann man sagen, dass dieser Dichter die Weltanschauung des „heiligen Kriegs“ der Zeit Konrads noch im 19. Jh. weiterhin beibehielt.

Der Leser kann wohl den Eindruck gewinnen, dass Fouqués Interesse einerseits auf den kämpferischen heldenhaften Geist des Roland und andererseits auf die Eigentümlichkeit besonderer Waffen und Instrumente gerichtet ist, wie das berühmte Schwert, den Helm und das Horn. Unter den

zehn Kapiteln dieses Werks wurde das Horn „Olivant“ in den Kapiteln 2, 4 und 6 ausführlich dargestellt. Die prächtigen Schwerter „Durendart“, „Alteclere“ und der Helm „Venerant“ spielten in den Kapiteln 7, 8 und 9 eine wichtige Rolle. Wir können uns vorstellen, dass Fouqué eine starke Sehnsucht nach dem Geist eines tapferen mittelalterlichen Ritters gehabt hat.

Friedrich Schlegel veröffentlichte 1806 sein episches Werk *Roland*, das nicht auf der Fassung von Konrad basiert, sondern hauptsächlich auf der *Pseudo-Turpin-Chronik (Historia Karoli Magni et Rotholandi)*, die im 12. Jahrhundert als eine Art von Werbung der Wallfahrt nach Santiago de Compostela geschrieben wurde. Obwohl der Titel des Werks von Schlegel *Roland* heißt, tritt Roland hauptsächlich nur in den Kapitel 7 und 10 in Erscheinung. In den anderen Kapiteln spielt Karl der Große die Hauptrolle.

Schlegel schrieb dieses Werk zu einer Zeit, als er einen starken Glauben an den Katholizismus hatte. Er übernimmt auch den Gedanken des „heiligen Kriegs“ aus der Zeit der Kreuzzüge, lobt einseitig den Feldzug Karls des Großen für die Ausweitung des Christentums und verherrlicht Rolands Martyrium. Seine Liebe zu christlichen Kriegerern und seine Abneigung gegen Heiden werden durchgehend im gesamten Werk sichtbar. Emotionale und subjektive Adjektive wie „schön“, „gut“, „treu“, „aufrichtig“, „brav“, „fromm“ usw. werden überall verwendet, um christliche Krieger zu charakterisieren, während bei der Darstellung von Heiden und Verrätern die Adjektive „wild“, „schlecht“, „böse“, „zornig“, „arg“, „mutlos“ usw. überhandnehmen. Man respektierte in der neuzeitlichen Gesellschaft seit der Aufklärung die humanistischen Prinzipien, wie die Versöhnung der religiösen Gegensätze, wie sie Lessing im 18. Jh. in *Nathan dem Weisen* aufzeigt, die Tolerierung unterschiedlicher Meinungen, die Selbständigkeit des Individuums usw. Diese Prinzipien werden bei Schlegel im 19. Jh. ausgeschlossen. Es scheint eindeutig anachronistisch, dass bei Schlegel nur die mittelalterlichen christlichen Grundsätze verherrlicht werden.

Immermann gestaltet in seinem Schauspiel *Das Thal von Ronceval* (1822) die Charaktere des alten Heldengedichts um und ersetzt sie durch ganz andere. Eine wesentliche Änderung bei Immermann ist, dass er die Hauptachse seines

Werkes vom christlichen Glauben auf die persönliche Liebe verschiebt. Diese Liebe verbindet sogar den Helden Roland auf der christlichen Seite und Zoraide, die Tochter König Marsilies auf der Seite der Heiden. Die Liebe nimmt eine große Dimension an, die den Unterschied in der Konfrontation im Krieg und den Gegensatz der Religionen überschreitet. Bei einem geheimen Treffen mit Roland spricht Zoraide von ihrem Wunsch, dem Schlachtfeld zu entkommen, das Meer auf einem Boot zu überqueren, um nach Mallorca zum Paradies des Friedens zu gelangen. Hier äußert Zoraide ihren wichtigen Entschluss, den religiösen Standpunkt des Muslims hinter sich zu lassen, die militärische Mission des Kampfes gegen Christen aufzugeben, sowie den Status der Prinzessin abzulegen. Sie möchte die Liebe als selbständiges Individuum verwirklichen. Der Kern des Trauerspiels liegt nicht im Martyrium des Helden, sondern darin, dass die reine Liebe durch den Krieg und den Verrat zerstört wird.

Bei Konrad macht Roland in einer Beratung den Vorschlag, Ganelon als Gesandten zu Marsilie zu schicken. Da dieser Auftrag sehr gefährlich sein kann, ärgert sich Ganelon über Roland und entschließt sich, ihn zu töten. Hierdurch verrät er die christliche Armee der Franken. Im Werk Immermanns versprach dagegen Karl der Große einst in Aachen, Ganelon das neue Land, das das fränkische Reich als nächstes gewinnen würde, als Lehen zu geben. Aber als der Feldzug nach Spanien weitergeht und der Erwerb Spaniens realistischer wird, will Karl dieses Versprechen nicht mehr erfüllen. Karl entschließt sich, Roland auf den spanischen Thron zu setzen. Bei Immermann nimmt daher Ganelon wegen des spanischen Throns Roland gegenüber eine feindliche Haltung ein. Es dürfte eine viel realistischere und überzeugendere Handlung sein, die Konfrontation über die Regierung eines Landes zum Motiv des Verrats zu machen, als das Ärgernis über die Nominierung einer gefährlichen Mission.

Karl der Große ist also schuldig am Verrat Ganelons, da er sein Versprechen auf diese Weise widerrufen hat. Bei Konrad wird Karl als unfehlbarer absoluter „Heiliger“ verehrt, aber Immermann zeigt deutlich den Irrtum und die Verantwortung Karls, indem er darlegt, dass Karl einmal gedankenlos ein Versprechen gibt und es später dann unaufrichtig widerruft.

カール・インマーマン 『ロンスヴォーの谷』 について

Im Werk Immermanns denkt Karl darüber nach, dass er in der Schlacht von Ronceval den hervorragenden Roland, viele Offiziere und Soldaten verloren hat. Er sagt dann, er wolle ins Kloster Compostela eintreten. Mit diesem Wort wird deutlich, dass Karl seinen Fehler erkennt.

